

# 文語の苑

メールマガジン第二十号（平成二十五年二月）

## 候文による案内状実例

鹿児島県には独自の県人会はなく宮崎県と合同の三州倶楽部実質的なる県人会にして、下記はその開催通知第一号及び第二号なり。同じき会の開催通知にして僅か一年を隔つるものなれど、その様式を全く異にす。一号にては仮名の使用は殆ど無く、仮にその仮名を削りても意味は通ずるものと覚ゆ。各位のご参考までご高覧に供する次第なり。

一、告旧薩摩藩出身者来る二十三日午後二時不拘晴雨袖ヶ崎島津邸に於て島津家御祖先並に旧薩摩藩出身殉難者祭典執行候条御参拝相成度此段広告候也

祭典委員長 子爵 牧野伸顕

二、拝啓益々御多祥奉賀候陳者例年の通り同志相謀り来る二十三日午後正二時より袖ヶ崎島津邸を借用し島津家御祖先並に旧薩摩藩出身殉難者祭典執行候条御賛成の上御参拝被下度此段御案内申上候 敬具

大正十年九月 日

祭典委員長 子爵 大迫尚敏

追て通知漏れの御方有之候やも難計候に付き御最寄の旧薩摩藩出身諸君御誘導被下度尚例年の通り祭典費として普通参拝者金五十銭以上学生等金十銭以上後持参被下度候

愛甲次郎

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

小倉百人一首 十八 壬生忠見

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり 人知れずこそ思ひ初めしか

「天徳の歌合せ」で、前回の平兼盛の「忍ぶれど色にいでにけり我が戀は ものや思ふと人の問ふまで」と争ったのが、この歌です。作者の壬生忠見は、古今集の撰者の一人、十五に取上げた壬生忠岑の子です。身分は父同様の微官、「天徳の歌合せ」の時には攝津の国の下級官吏だったらしい。歌の名手として知られ、この歌合せには勅命を以て召されました。忠見にとってこの上ない名譽でしたから、喜び勇んで、攝津の任地から田舎装束のまま、肩に柿色の小袴を懸けて上京し、「方人」の席の末席に連なります。身分は低いながらこの人は、自分の歌に絶大の自信がある。ですからこの「忍ぶ戀」の題の詠進歌に對しても、まさか自分の歌に對抗できる歌が出るはずはないとゆったりと構へ（え）て居りました。所が右方から上の平兼盛の歌が詠進されると、俄かに慌てて不安を覚え始めます。判者の判定がなされ、自分が負けと決まると、もう食物がのどを通りません。「不食（ふじき）の病」に取憑かれました。心配した平兼盛が病床に見舞ふ（う）と、忠見は歌合せの日あなたの歌に負けたことを知り、「心ふさがりて」寝付いてしまったと語り出します。そのまま病から本復することなく身まかったとするのが傳承です。現代の人から見れば、たかが歌一つでと、大袈裟に思は（わ）れるかも知れませんが。しかし平安時代の歌人たちにとって、和歌とはそれだけの重みを持ったものでした（せ）（し）（よ）（う）。尤も江戸時代の契沖の考証によれば、この傳承は事實ではなかったや（よ）（う）です。

平安時代以来の和歌の歴史上、平兼盛と壬生忠見の歌の優劣は、しばしば話題になりました。忠見が負けて命を落した傳承がある（せ）（い）で、どうしても判官鼻肩の心情が働いてしまふ（う）ためか、歌としては「戀すてふ」の方がよい、とした論者が多いや（よ）（う）です。天皇が「忍ぶれど」の歌をお吟じになったとされるのは、もともと両方の歌を口誦なさったのに、たまたま「忍ぶれど」の歌だけを聞いた人が藤原實頼に告げたに過ぎない、とも言は（わ）れます。歌の意味は、「忍ぶれど」は「戀の思ひ（い）を押さへ、隠して來たけれども、気持は自然と外に表れてしまふ（う）ものらしい。物思ひ（い）に沈んで居るや（よ）（う）に見えるが誰かを戀してゐ（い）るのかと人から聞かれるまでになった」、「戀すてふ」は「自分が戀をして居るとの噂が早くも立ってしまった。他人に知られないや（よ）（う）に人に思ひ（い）を掛け始めたのに「くらゐ（い）の意味で、前者はおっとりとした素直な歌、後者はどこかに激しい情念の走る歌」と云った作者の性格の違ひ（い）に基づく情感の違ひ（い）はあります。それがそれぞれの歌の好き嫌ひ（い）になるかも知れません。しかし作者の技倆の冴えも、歌の格の高さも、甲乙付け難いのではないでせ（し）（よ）（う）か。

藤原定家は百人一首に、この二つの歌、二人の歌人を、歌合せのときの勝ち負けの順に並べて収録しました。それはたとへ（え）定家が、この歌合せの判者だったとしても、何れを勝ちとも定め難く、「持」の判定をしたことを示すものではないでせ（し）（よ）（う）か。それほどこの二つの歌は、和歌の歴史に残る何れ劣らぬ秀歌だったのでせ（し）（よ）（う）。

加藤淳平

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

ふじのねにのぼりて見れば 愛國百人一首を讀む（十六）

（平成二十五年二月二十四日）

ふじのねにのぼりて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり 下河邊長流

この歌は富士山に登つて見たら下界の眺望が天と地とが殆ど接してゐることに氣附いたといふ、一見單純な表現の中になかなか深い意味が含まれてゐます。

天地の分れと富士山と言へば、眞つ先に思ひ浮べるのは、萬葉集にある山部赤人の歌です。

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原  
振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行き  
はばかり 時じくそ 雪は降りける 語り繼ぎ 言ひ繼ぎ行かむ 富士の高嶺は

天地が分れて以來、神々しく、高貴な山が、駿河國にある富士の山である。その山を仰ぎ大空を見響かすと、山を通過する太陽も光が隠れ、照り輝く月も山の陰に入るとその光も見えない。だから白雲も憚つて山を越えて行かうとしない。そんな中で雪は時を構はず降り積もつてゐる。こんな素晴らしい富士山のことを語り繼ぎ言ひ繼いで行きたいものである。

天地が分れるといふ概念は、今日では誕生したばかりの地球の表面を蔽つてゐた高濃度のガス體がやがて透明な大氣となつて、天と地とが明確に分離したといふ事實から、當然の事と受取られてゐますが、上古に於て明確に「天地の分れ」を意識し、これに「始り」を意味する漢語の「開闢」を當てましたのは、我が國文化の特色といへます。さうして赤人の歌を知識として知つてゐた下河邊長流が實際に富士の高嶺に登つて下界を眺めて天地が分れるの意味の完全な理解に達したことを、「わかれざりけり」と表現してゐるのです。ここで用ゐられたやうな「けり」は「氣附きのけり」と呼ばれます。

長流は我が國の古學復興の祖といはれます。時は江戸時代初期、長い戦亂の世が終り、學問で身を立てる時代が始りましたが、當初は勿論漢學が主流でした。そのやうな状況の中で、日本の古典を採上げた其のきつかけをこの歌は「まだいくほども」の句によつて示してゐて、これが「萬葉集管見」に結實していつたと思はれます。

長流は萬葉集の注釋を徳川光圀に依頼されますが、親友の契沖を代りに推薦します。ここから國學は目覺しい發展を開始することになります。

市川浩

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

文語歌曲「川中島」 新編教育唱歌集 明治二十九年

數へ歌は、お手玉のおさらひの時に歌はれてゐたといふ話から、お手玉歌へと話題が變り、當今(今上陛下)の一日前に生れた、歌好きの筆者の妹が聲にしたのは、「いちれつらんぱんはれつして、日露戦争はじまつた」と「さいりゅうぞんはきりふかし」でした。今はほとんど見掛けなくなつたお手玉ですが、戦争前の女の子は誰もが歌をくちずさみながらお手玉を放り上げて遊んでゐたもの、男の子は「一玉やべー獨樂で、お手玉には手をだしてゐませんでした。しかし歌は聞いてゐました。」

「數へ歌の原歌が西南戦争だつたやうに、お手玉歌も日露戦争や川中島の戦ひそのものの歌だつたり、なぜか戦争の歌が多かつたのですが、「一列談判」西條山は霧深し」など歌の意味はまつたく解つてゐなかつたのが御愛嬌、女兒には意味がわかる必要もなかつたでせう。音の傳承とはこのやうなもので、しかし誰にも懐かしい。川中島の戦はずに頼山陽の詠んだ有名な漢詩、題不識庵(上杉謙信)撃機山(武田信玄)圖(圖)があり、詩吟としてよく歌はれて來ました。

鞭聲へんせい肅肅しゆしゆ夜過河 曉見千兵擁大牙 遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

鞭聲(馬に當てる鞭の音)肅肅(音をたてず靜かに)夜河をわたる  
曉に見る(上杉の)千兵の大牙(大將の旗を立ててゐるのを)を擁するを  
遺恨(謙信にとつては無念)なり 十年、一劍を磨き(に磨いたのに)  
流星光底(打下ろした劍の光)長蛇(信玄)を逸す(打ちもらした)

この戦を主題とした唱歌が作られたのは、旗野十一郎の作詞によるものが最初でせう。

## 川中島

一、西條山は霧ふかし 筑摩ちくまの河は浪あらし  
遙に聞こゆる 物音は 逆巻く水が つはものか  
昇る朝日に 旗の手の きらめくひまに くるくるくる

\* つはもの 普通は兵士を指しますが、武器の意味もあります。

\* ひま 暇な時間、休みの他に、時間的空間的な切れ目の意味もあります。

二、車がかりの陣ぞなへ めぐる合圖の関(とき)の聲

あはせる甲斐もあらし吹く 敵を木の葉と かきみだす  
川中島の戦は 語るも 聞くも 勇ましや

\* 車がかり 風車のやうな陣形を言ひますが、実際には江戸時代の創作で、實戦のものではないやうです。

\* あはせる甲斐 謙信の攻撃に信玄が反攻したこと。

谷田貝常夫

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

## 郭公と橘

和歌では、「橘」と「ホトトギス」は極めて関係が深いものです。新古今の歌を一首御紹介しませう。

### 郭公花橘の香を求めて鳴くは昔の人や恋しき

(ほととぎす／はなたちばなの／かをとめて／なくはむかしの／ひとやこひしき)

橘の花の香は、昔の人(亡き人や別れた人)を思ひ出させるよすがになるといふことは、歌の重要な知識です。

「ホトトギス」を漢字で表記すると、「郭公」「不如帰」「杜鵑」「時鳥」などがあります。

「不如帰」を訓読すると「かへらざるがごとし」「だと思つてゐる人が多いのですが、もしさつだつたら、  
「不如帰」としなければいけません。

「不如帰」を訓読すると、「帰るに如かず」です。「帰るのが一番よい」といふ意味。

「不如帰」は中国から入つて来た漢語です。恐らくは、日本の子供たちの「蛙が鳴くから帰ろ」とか「烏なげ鳴くの」のやうに、「ホトトギスが『もう帰りなさい』と鳴いてゐる」といふ理屈で、彼の鳥に「不如帰」といふ漢字を宛てたのでせう。

学界の定説も御紹介しておきます。

「不如帰」の中国語での発音は *burugui* (ブルীগエ/現代北京音) です。昔の中国人には、ホトトギスの鳴き声がそんなふうに聞えたといふのです。これも、なるほどと思はれます。

ぢやあ「帰るに如かず」といふのは出鱈目なのか、などと言はないで下さい。

*burugui* といふ発音と「帰るに如かず」といふ意味をかけて、この漢字を宛てたのではないかと私は想像してゐます。

「郭公」をホトトギスと読むのは如何でせう。

「郭公」は、音読すれば「かくこう(カッコウ)」です。

実は、カッコウとホトトギスは近縁の鳥なのです。英語では、ホトトギスのことを *the cuckoo* と言ひます。ヨーロッパには、カッコウはゐますが、ホトトギスは存在しないので、東アジアのホトトギスを英訳するときに、「小さなカッコウ」としたのではないかと思はれます。

元来、日本でも、中国でも、ホトトギスとカッコウは同じ鳥だと思はれてゐました。

そして、その「ホトトギスつまりカッコウ」を、中国では「郭公 *guogong*」、日本では「ホトトギス」と呼んでゐたのです。

「郭公」の音が「かくこう」、訓が「ほととぎす」になつたのは、何の不思議もありません。やがて、日本では、大きい方を「かくこう」、小さい方を「ほととぎす」と呼び分けるやうになりました。

和泉式部と言へば、平安時代のエリカ様

為尊(ためたか)親王・敦道(あつみち)親王の兄弟とのロマンスが有名です。

この二人、三条天皇の同母弟で、実は藤原道長の甥なのです。道長の姉・超子と冷泉天皇の間に生まれた皇子たちです。

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

最初、兄の為尊親王と交際してゐましたが、この人は夭折してしまひます。喪が明けないうちに、弟の敦道親王が式部を訪ねてきて、侍女に橘の枝を預け、会ふこともなく去つて行きます。

もちろん、「昔の人を思ひ出させる、この橘を見て、兄を思ひ出して下さいね」と言つてゐるのです。

式部は、敦道親王に歌を贈ります。

**薫る香によそふるよりは郭公聞かばや同じ声やしたると**

「よそふる」は「かこつける・なぞらへる・言寄せる」の意。

当時の人がこの歌を読めば、「郭公」が出て来るからには、「薫る香」が橘であることはすぐに察せられるのです。

「橘の香にかこつけて、亡き人を思ひ出すよりは、郭公の声が同じであるかどうか聞きたいものです」といふのが一首の意味になります。

といふことは、「あなたが、お兄様と同じ声をしていらつしやるかどうか、聞きたいものです」と、弟を誘惑してゐるのです。会へなければ、声は聞けませんから、「あなたに会ひたいものです」と招待してゐることになります。

果して、敦道親王は、その誘惑に陥落して（始めから誘惑されたいと思つてゐたやうですが）、式部は亡くなつたばかりの恋人の弟と交際を始めました。

見上げた根性です。

バレンタインデーのなかつた当時の女性は、歌をチヨコレートの代りに使つたわけです。

年齢は、式部が、二人の親王のちやうど真ん中当り。今度は年下を狙つたことになります。

高田友

# 文語の苑

メールマガジン第二十号

トースト

三十数年前、世界銀行（国際復興開発銀行）東京事務所に勤務してあり。当時の世銀総裁はケネディ政権下の国防長官なりしロバート・マクナマラなりき。ピューリッツァー賞受賞のデービッド・ハルパースタムによる「ベスト&ブライテスト」の中にも登場する秀才なり。この人、俄かに来日することありき。初の来日とぞ仄聞せる。

東京事務所長ワシントンに赴き、多岐にわたる指示を受けて帰国、吾らにも色々指示たまはりぬ。そのひとつは帝国ホテルのレセプションなり。焼きパンを出せといふ。カナツペのことならむと覚ゆ、所長に確認するにも、あくまでも朝食に供せらるるトーストせしパンなりと言ひはる。不可解なることなりと思ひて、本部に照会せり。豈に図らんや。マクナマラは「トーストをせむ」と言ひたるなり。トーストとは「乾杯」の謂ひなり。一同驚愕すること一方ならず。

初来日のマクナマラ総裁はベトナム戦争の事について、メディアに対して極めて敏感なりとの噂あり。ここに於て日程等も含め詳細かつ膨大なる「フリーフィンク・ブック」を作成せよとの指示あり。毎晩徹宵の作業となれり。完成したる資料の厚さ、十センチに垂んとす。余、広報担当者とともに、関係者十人に、資料を届くるの責に任せらる。

眠る暇もなき夜続き、やうやくワシントンのホテルに到着したるときには、疲労困憊の極みに達せり。ホテルの受付に総裁のスピーチライターよりメッセージあり。一通の封書なり。手を取れば、得体知れざる感触あり。振るにガガガサと音のしてあり。開封するに、驚くなかれ、トーストを見出したり。英文にて「トーストをせむ」とあり。よりて、呵呵大笑せし記憶あり。かくして帰国したる数日後、世銀総裁マクナマラ来日す。

総裁を迎ふる準備の甚だしきに追はるる余り、総裁来日後の事情は悉皆忘れ去りたり。いまだに脳裏に残るは、我国、首都高速道路、新幹線等、世銀よりの借金を完済して、翻つて供与国となり、日本市場に於て資金調達を始めたることのみ。

赤谷慶子